



お茶のほかに、参加者が差し入れて持ってきたお菓子も。にぎやかなおしゃべりで盛り上がります。

東京都中野区の都営住宅の集会室では、毎週金曜日に「来らっせしらさぎ」というサロンが開催されています。「来らっせ」は福島の方言で「こちらにいらっしやい」という意味を表します。東日本大震災の広域避難者を対象に始まったサロンは、今では地域の住民も共に集う場になっています。

避難者が集まるお茶会から 地域の交流の場へ

2015年4月24日、中野区白鷺の都営住宅の集会室からにぎやかなおしゃべりが聞こえてきました。「今日は人が少ないね」「お花見で地元に戻っている人たちがいるんだって」。今回の参加者は15人ほど。普段は30人を超える人が集まります。

東日本大震災の影響で中野区へ避難してきた人びとが少しでもほっとできるようと、毎週金曜日に都営住宅の集会室で開催されているサロン「来らっせしらさぎ」。お茶を飲みながら日々の生活のことを話したり、地元の情報交換をするほかに、専門家を招いての法律相談や、健康相談ができる日もあります。中野区には東京都内の自治体の中で三番目に多い約390人が避難しており、中野区白鷺の都営住宅には約190人が暮らしています。

このサロンは中野区社会福祉協議会が東京都社会福祉協議会の「孤立化防止事業」の一環として取り組んでいます。運営スタッフは手を挙げた避難者と、東京都生協連を中心としたコープ災害ボランティアネットワーク（以下CO災ボ）

地域に活気をつくりだす 交流サロン「来らっせしらさぎ」

東京都生協連・コープ災害ボランティアネットワーク



サロンを運営している皆さん(写真左:宮島 有さん、右から3人目:藤田はるみさん、右:近藤宣子さん)。

同じ集会室の中では、CO災ボのボランティアに子育ての相談をする赤ちゃん連れのお母さんの姿も見られました。



※1 大規模災害発生時に、行政や諸団体と連携し、被害の軽減・拡大防止を目指す東京都内の生協組合員・役職員の団体。メンバーは、「コープ災害ボランティア養成講座」の修了者や災害時ボランティアとして派遣された経験のある人など。

東京都生協連の復興支援活動

東京都生協連 組織課長
荒井伸幸さん



東京都生協連では、1995年に発生した阪神・淡路大震災をきっかけに、東京都と災害時応急生活物資供給協定を結びました。また、99年から災害時のボランティア養成講座を開催し、受講した組合員・役員は現在500人を超えています。

2000年に発生した三宅島噴火災害では、島の灰の除去作業などに関わり、帰島した島民の支援を今も継続しています。そのほかにも中越地震や新潟大雨洪水などの各地の被災地への支援に取り組みました。

東日本大震災後は、11年4月から2年間、東京都内の生協と協力し、南三陸町の皆さんが避難されている宮城県登米市でふれあい喫茶(交流サロン)を開催しました。

また、11年当初は東京都に約1万人の避難者の方がいたことから、東京都生協連の事務所がある中野区で、都営住宅でのサロンの開催に協力し、現在に至っています。

防災・減災の核になる人材の育成とネットワークづくりを進めます

CO災ボ 代表幹事
大矢憲二さん



CO災ボは、500人を超える都内生協の組合員・職員が参加しているボランティア組織です。今年で15回を数える

「コープ災害ボランティア養成講座」を中心に、ボランティアの育成や災害への備えの啓発、東京都が開催する総合防災訓練への参加、被災地や都内で暮らす被災者の支援などにも取り組んでいます。

東日本大震災発災後は、他のボランティア団体と連携して被災地で支援活動に取り組むとともに、今回紹介している「来らっせしらさぎ」にも参加を続けています。また、福島の子どもたちと保護者の保養を目的とした「夏休みコヨットin東京」にも、14年に参加し、子どもたちのサポートに取り組みました。

この間の活動を通じ、私たちはさまざまな被災地・被災者の現状と課題を学びました。直下型地震が起こることが予想され、水害にも弱い首都圏に住む私たちにとって、災害は決して人ごとではありません。今後も求められる被災地・被災者支援を続けながらも、これまでの活動からの学びを生かし、大規模災害に備えて地域やコープの活動の中で防災・減災の核になる人材の育成とネットワークづくりを進めていきます。

血圧を測り、保健師に健康相談をする場面も。



のメンバーがボランティアとしてお手伝いをしながら、自主的な運営を行なっています。11年にサロンを始めたころの参加者は大半が避難者でしたが、中野区社会福祉協議会や都営住宅の自治会長呼び掛けで、徐々に近隣住民も参加するようになりました。有さんは、「毎週開催しているので、運営スタッフの皆さんの負担も大きいと思います。でも、スタッフ会議で今後の方向性を話し合っていたときに『避難者に限らず、周りに知り合いがいなくて引きこもっている住民が外に出ようと思つたときに、いつでも気軽に立ち寄れる場が必要ではないか』という意見が出て、週1回のペースを崩さずに活動する

ことにしたんです」と、このサロンを継続して開催する意義を話します。その言葉どおり、今まで姿を見せなかった住民が突然集会所を訪れることもあるといいます。「来らっせしらさぎ」は避難者だけではなく、地域に住む人びとの孤立を防止する役割も担っているのです。

一人ひとりに寄り添った活動を続けていく

現在は地域の人びとが集まる温かい雰囲気のコアサロンですが、東日本大震災の直後はさまざまな問題がありました。発災以来ボランティアを続けているCO災ボの近藤宣子さんと藤田はるみさんは、4年間の活動をこう振り返ります。「震災が起きた11年当時は、避難

してきた人たちが受けた嫌がらせの話や、地震で受けた被害の大きさ、補償の問題などの話題では、私たちボランティアもどう接していいかわからないときがありました。今も震災当時を思い出してよく眠れないという人もいます。それでも、このサロンで不安に思っていることや楽しみにしている地域のイベントなどについて話すことで、少しずつでも前向きな気持ちになつてもらえていると思います」

サロンによく顔を出すという男性は「私は被災者ではありませんが、こうした場があつて東北の人と出会えたことがうれしいですね。最近ではみんないろいろなところに出掛けているんですよ」と教えてくれました。今、避難者の間では応急仮設住

※2 宅の入居期限が問題になっていきます。入居期限が切れた後、中野区でのくらしを続けるのか、別の土地で生活を始めるのか、震災前に生活していた土地へ戻るのか、避難者は選択を迫られています。

「中野区から去っていく人もこれから多くなつてくると思います。寂しい気持ちもありますが、集まることを楽しみにしている参加者が気持ち良く過ごせるように、一人ひとりに寄り添ったサロン活動を続けていきたいですね」(宮島さん) 地域の人びとが集い、つながりをつくる「来らっせしらさぎ」。東日本大震災で被災した人びとに限らず、住民の高齢化やコミュニティの希薄化などの課題を抱える地域社会には、こうした場が必要とされています。

※2 東京都では、東日本大震災の影響で被災3県から避難している被災者に対し、応急仮設住宅として都営住宅および民間賃貸住宅などを提供している。